

◆ 今週のコメント

- ・ **アメーバ赤痢**の報告が1例(男性, 30歳代)あり, 本年11例目となっています。推定感染地域は国内で, 推定感染経路は性的接触(異性間)となっています。
- ・ **手足口病**の定点当たり報告数は, 2.18(87例)で, 3週連続で急激に増加しており, 過去5年平均値を大きく上回っています。例年, 第27週～30週にピークを迎えておりますので, 今後の動向にご注意ください。
- ・ **突発性発しん**の定点当たり報告数は, 0.75(30例)で, 本年で最も多くなっています。年齢階級別では, 0歳から2歳で報告があり, 6箇月から1歳が24例(80.0%)を占めています。
- ・ **伝染性紅斑**の定点当たり報告数は, 0.73(29例)で, 第10週(3月7日～13日)以降, 過去5年平均値を上回り, 本年で最も多くなっています。本疾患は, 数年周期で流行し, 平成11年以降では, 平成13年～14年及び平成18年に流行しています。今後の動向にご注意ください。年齢階級別にみると, 5歳が8例(27.6%)と最も多くなっています。
- ・ **咽頭結膜熱**の定点当たり報告数は, 0.50(20例)で, 3週連続で増加しています。例年, 6月下旬～8月にピークを形成しますので, 今後の動向にご注意ください。年齢階級別にみると, 1歳及び2歳が最も多く5例(25.0%)で, 1歳～5歳で90.0%を占めています。

◆ 今週のトピックス: <ヘルパンギーナ>

ヘルパンギーナの定点当たり報告数は1.30(52例)で, 先週(0.63)の約2倍となっています。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数把握の感染症

- ・ 五類: アメーバ赤痢(腸管アメーバ症)2例【1月以降の累積報告数 11例】

定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点67, 小児科定点40, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	0.01	1
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	4.03	161
	② 手足口病	2.18	87
	③ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.30	52
	③ ヘルパンギーナ	1.30	52
	⑤ 突発性発しん	0.75	30
眼科	流行性角結膜炎	0.60	6

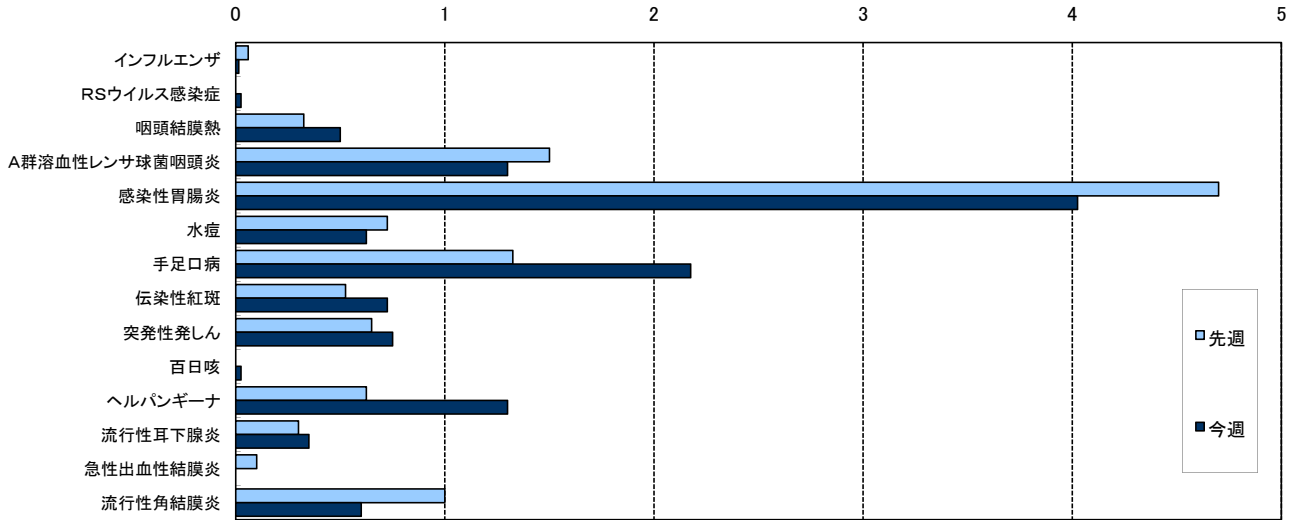
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <ヘルパンギーナ>

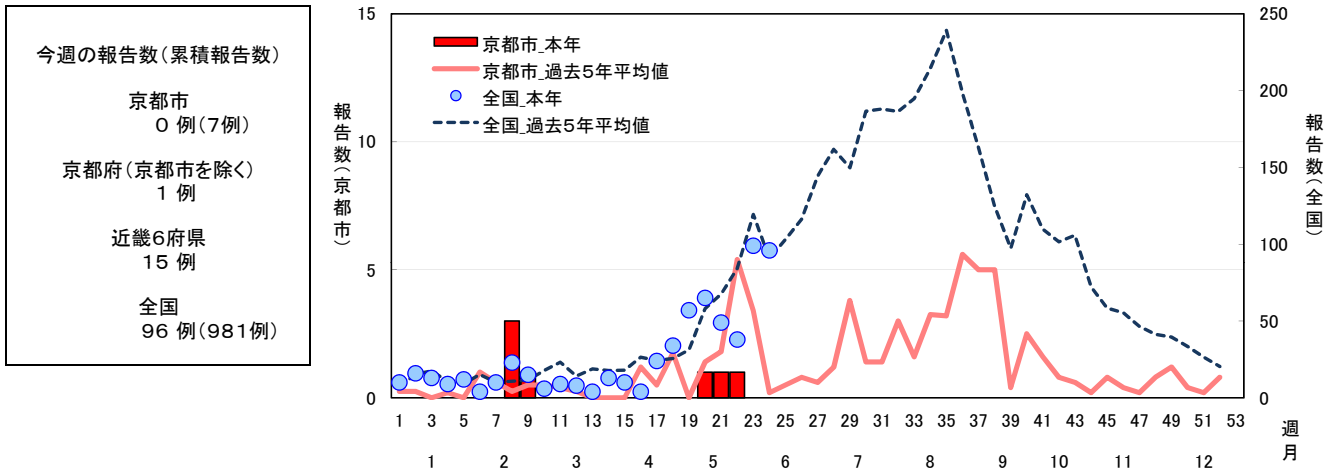
(注) 京都市のデータは, 平成23年6月23日現在の報告数で, 全国の還元データと若干異なる場合があります。また, 本情報での患者数は, 届出医療機関所在地での集計で, 患者の住所を示すものではありません。

◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第24週)と先週(第23週)の定点当たり報告数の比較

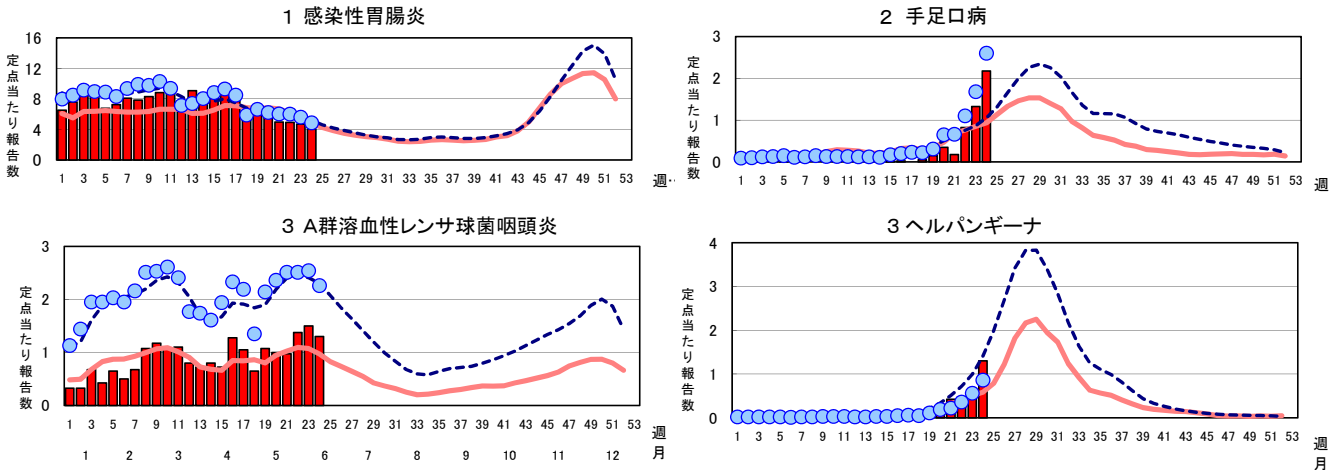


2 腸管出血性大腸菌感染症(三類感染症)の推移

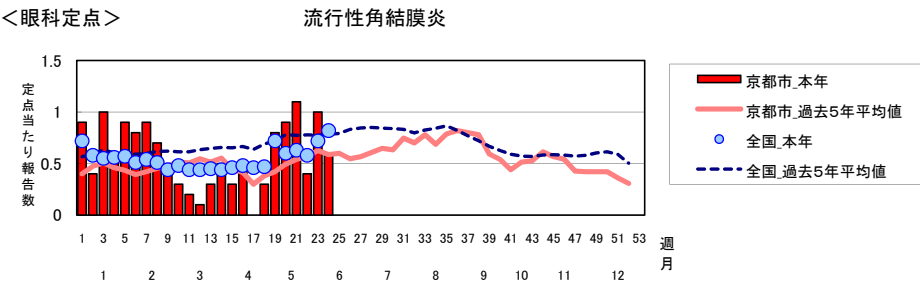


3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



<眼科定点>



第24週(6月13日～6月19日)トピックス: <ヘルパンギーナ>

今週の定点当たり報告数は1.30(52例)で、先週(0.63)の約2倍となっています。

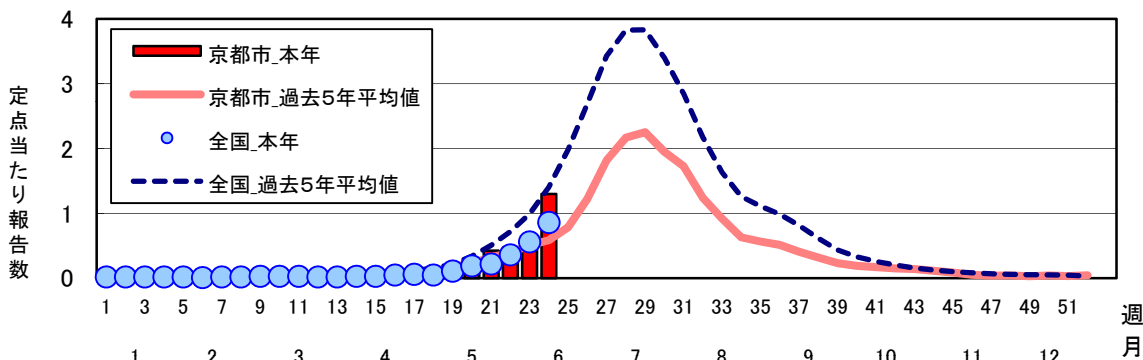
ヘルパンギーナは、季節性が明確で、毎年、5月頃から増加し始め、7月から8月の夏季に流行し、10月頃にはほとんどみられなくなります。本年は、京都市では、第21週から報告数が増加しています。夏季に向けて、患者数のさらなる増加が予想されますので、動向に注意してください。

年齢階級別にみると、1歳及び3歳が12例(23.1%)と最も多く、1～3歳が65.4%を占めています。前週に比べ、3歳が急増しており、20歳以上が2例ありました。

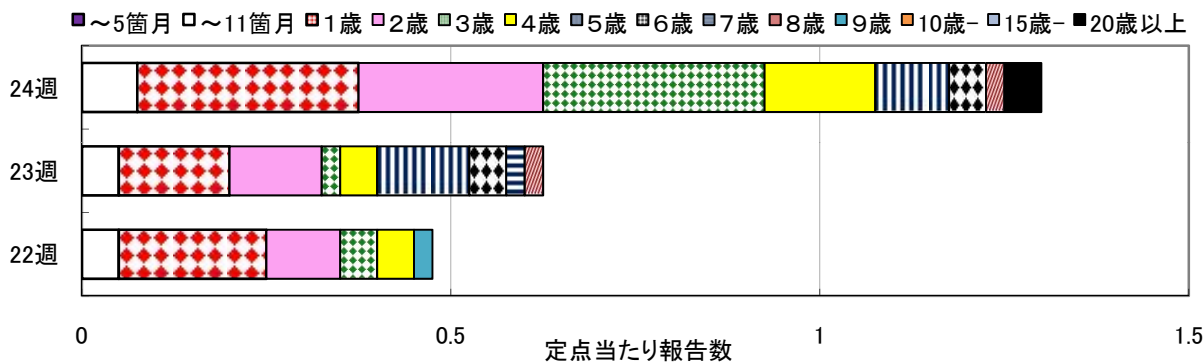
行政区別では、11行政区中、6行政区から報告があり、南区、山科区、伏見区で多くなっています。

なお、過去5年間にヘルパンギーナとして京都市内病原体定点から、京都市衛生環境研究所に提出された55検体からウイルスの検出されたものは31検体(56.4%)で、コクサッキーウイルスA群が23検体(41.8%)、単純ヘルペスウイルスI型 3検体(5.5%)、その他 3検体となっています。

本市及び全国の定点当たり報告数の推移



年齢階級別定点当たり報告数の推移



行政区別定点当たり報告数の推移

